

<特集「他動性」>

## タガログ語の他動性 Transitivity in Tagalog

林 真衣  
Mai Hayashi

東京外国語大学言語文化学部  
School of Language and Culture Studies, Tokyo University of Foreign Studies

**要旨**：本稿は、特集「他動性」のアンケートに基づいて、タガログ語のデータを提供することを目的とする。

**Abstract**: This article offers Tagalog data based on the questionnaire for the special issue “Transitivity”.

**キーワード**：他動性, タガログ語

**Keywords**: transitivity, Tagalog

### 1. はじめに

タガログ語は主要部先行型言語で、典型的な他動詞文では VSO の語順をとる。動詞はヴォイス体系を持ち、動作主ヴォイス・被動者ヴォイス・場所ヴォイス・状況ヴォイスの少なくとも4つのヴォイスを区別する (Himmelman 2005)。また格標識は、主格標識の *ang/si*、属格標識の *ng/ni*<sup>1</sup>、場所格標識の *sa/kay* が存在する。前者が普通名詞、後者が個人名に対する標識である。主格標識としては、遠称主格指示詞に由来する *yung* が普通名詞に用いられることもある。人称代名詞は、人称・数・格によって以下のように屈折する (表1を参照)。

表1: タガログ語の人称代名詞

	主格形	属格形	場所格形
1SG	ako	ko	sa akin
2SG	ikaw/ka	mo	sa iyo
3SG	siya	niya	sa kaniya
1PL.INCL	tayo	natin	sa atin
1PL.EXCL	kami	namin	sa amin
2PL	kayo	ninyo	sa inyo
3PL	silá	nila	sa kanila



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。  
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

<sup>1</sup> タガログ語の正書法では ‘ng’ が [ŋ] と対応している。属格標識 *ng* は /naŋ/ と発音され、複数標識 *mga* は /maŋa/ と発音される (Himmelman 2005)。

この調査は、マニラ首都圏に隣接するリザール州出身の20代女性に協力していただいた。アンケートの日本語文と英語文の両方を踏まえて、2020年8月29日に回答されたデータである。

## 2. 言語データ

まず「殺す」といった意味的他動性の高い動詞から見ていく。語根 *patay* に付加する接辞が異なっており、「殺したが死ななかった」という表現は可能である<sup>2</sup>。

(1-a) 彼はそのハエを殺した。

*P<in>atay niya ang langaw.*  
 <PV.RL>kill 3SG.GEN NOM fly

(1-b) 彼はその箱を壊した。

*B<in>asag niya ang kahon.*  
 <PV.RL>break 3SG.GEN NOM box

(1-c) 彼はそのスープを温めた。

*<In>init niya ang sabaw.*  
 <PV.RL>warm 3SG.GEN NOM soup

(1-d) 彼はそのハエを殺したが、死ななかった。

*P<in>atay niya yung langaw, pero hindi naman na-matay.*  
 <PV.RL>kill 3SG.GEN NOM fly but NEG indeed AV.RL-die

以下は、衝撃を与える出来事を描写する動詞述語の例である。語根 *bangga* に非意図を表す接頭辞 *ma-* が付加することによって、構文や語根は変化させずに意図性の違いを表現している。(1-a) から (2-c) では被動者ヴォイス動詞を用いており、他動性が高い動詞の場合には属格行為者、主格被動者という格枠組みをとる傾向があると言える。

(2-a) 彼はそのボールを蹴った。

*S<in>ipa niya ang bola.*  
 <PV.RL>kick 3SG.GEN NOM ball

(2-b) 彼女は彼の足を蹴った。

*S<in>ipa niya ang binti niya.*  
 <PV.RL>kick 3SG.GEN NOM leg 3SG.GEN

<sup>2</sup> 本稿で用いる略号は以下の通り：ADV-adverb, AV-actor voice, DEM-demonstrative, DIS-distal, EXCL-exclusive, EXS-existential, GEN-genitive, INCL-inclusive, LK-linker, LOC-locative, LV-locative voice, NEG-negation, NOM-nominative, NVOL-non-volitional, P-personal name/kinship term, PL-plural, PROX-proximal, PV-patient voice, Q-question, RDP-reduplicant, RL-realis, SG-singular, 1-first person, 2-second person, 3-third person, “<”-infix, “=”-cliticization, “~”-reduplication.

(2-c) 彼はその人にぶつかった (故意に).

*B<in>angga niya siya.*  
<PV.RL>crash 3SG.GEN 3SG.NOM

(2-d) 彼はその人とぶつかった (うっかり).

*Na-bangga niya siya.*  
NVOL.PV.RL-crash 3SG.GEN 3SG.NOM

既に映像や音を捉えているかという他動性の違いでは場所格標識は現れていない. 存在や所有の意味を持つ述語が用いられているという点が, (3-a) と (3-c) に共通している.

(3-a) あそこに人が数人見える.

*May na-ki-kita ako=ng mga tao doon.*  
EXS NVOL.PV.RL-RDP~see 1SG.NOM=LK PL people DEM.DIS.LOC

(3-b) 私はその家を見た.

*Na-kita ko yung bahay na iyon.*  
NVOL.PV.RL-see 1SG.GEN NOM house LK DEM.DIS.NOM

(3-c) 誰かが叫んだのが聞こえた.

*Na-rinig ko=ng may s<um>i~sigaw.*  
NVOL.PV.RL-hear 1SG.GEN=LK EXS RDP<AV.RL>~shout

(3-d) 彼はその音を聞いた.

*Na-rinig niya ang tunog na iyon.*  
NVOL.PV.RL-hear 3SG.GEN NOM sound LK DEM.DIS.NOM

発見・獲得・生産などの動詞の目的語であることが要因で, 異なる格枠組みや構文を用いることはない. ただし, 動詞に付く接辞によって volitional かどうかの対立があり, non-volitional な動詞では可能・達成・自発・偶然といった意味が表現される (Schachter and Otones 1972: 330-333). *hanap* は volitional/non-volitional の交替が「探す」と「見つける」の区別と対応する. ここでは *hanap* に接頭辞 *na-* を付けることで「見つけた」という達成を表現している (volitional の (5-c) と比較されたい).

(4-a) 彼はなくしたカギを見つけた.

*Na-hanap niya yung susi=ng na-wala na.*  
NVOL.PV.RL-find 3SG.GEN NOM key=LK AV.RL-lose already

(4-b) 彼は椅子を作った.

*G<um>awa siya ng upuan.*  
<AV.RL>make 3SG.NOM GEN chair

追及を表す動詞の目的語にも, 異なる格や構文を用いることはない. タガログ語では時制の違いが形

式的に示されないため、現在と過去どちらの事態を表す場合も同じ形式を用いることができる。そのため (5-a), (5-b) ではどちらも継続相が用いられている。(5-b) に関しては、リンカーに後続する要素は関係節の用法と異なる<sup>3</sup>。

(5-a) 彼はバスを待っている。

*H<in>i~hintay niya yung bus.*  
RDP<PV.RL>~wait 3SG.GEN NOM bus

(5-b) 私は彼が来るのを待っていた。

*H<in>i~hintay ko siya=ng d<um>ating.*  
RDP<PV.RL>~wait 1SG.GEN 3SG.NOM=LK <AV>arrive

(5-c) 彼は財布を探している。

*H<in>a~hanap niya yung pitaka niya.*  
RDP<PV.RL>~find 3SG.GEN NOM wallet 3SG.GEN

「知る」の意味に対しては *alam* を、「(人を見識っている)」には *kilala* を用いる。(6-a) の *alam* は形容詞の語幹である。*kilala* は動詞の語幹として用いられることがあるが、ここでは単独で用いられており、他動性が低くなるにつれて動詞が明示的なヴォイスの形態素を欠く傾向にあると言える。「わかる/できる」に対しては形容詞 *marunong* が用いられ、後続する動詞を修飾する。

(6-a) 彼はいろんなことをよく知っている。

*Maalam siya sa marami=ng bagay.*  
know 3SG.NOM LOC many=LK thing

(6-b) 私はあの人を知っている。

*Kilala ko yung tao=ng iyon.*  
know 1SG.GEN NOM person=LK DEM.DIS.NOM

(6-c) 彼はロシア語ができる。

*Marunong siya mag-salita ng Russian.*  
good 3SG.NOM AV-speak GEN Russian

記憶に関する動詞でも、異なる格枠組みや構文は用いない。

(7-a) あなたはきのう私が言ったことを覚えていますか？

*Na-a~alala mo ba yung s<in>abi ko kahapon?*  
NVOL.PV.RL-RDP~remember 2SG.GEN Q NOM <PV.RL>say 1SG.GEN yesterday

<sup>3</sup> リンカーは語や文をつなげる要素で、それらの関係を示す以外には意味を持たない (Schachter and Otanes 1972: 107-109).

(7-b) 私は彼の電話番号を忘れてしまった.

*Na-kalimut-an ko yung number niya.*  
NVOL.RL-forget-LV 1SG.GEN NOM number 3SG.GEN

(8-a) と (8-c) ではそれぞれ疑似動詞を, (8-b) は形容詞を用いている. (8-b) では疑似動詞 *gusto* を用いた表現も可能ではあるが, (9-a) のように「欲しい」という意味が強くなる<sup>4</sup>. 非人称構文の場合は感情主体も属格になるが, 感情の対象に関しては属格または対格である格枠組みをとる傾向があると言える.

(8-a) 母は子供たちを深く愛していた.

*Mahal na mahal ng nanay yung mga anak niya.*  
love LK love GEN mother NOM PL children 3SG.GEN

(8-b) 私はバナナが好きだ.

*Mahilig ako sa saging.*  
fond.of 1SG.NOM LOC banana

(8-c) 私はあの人が嫌いだ.

*Ayaw ko sa tao=ng iyon.*  
hate 1SG.GEN LOC person=LK DEM.DIS.NOM

タガログ語で「欲しい」「要る」という感情を表現するには, 疑似動詞を用いるのが一般的である.

(9-a) 私は靴が欲しい.

*Gusto ko ng sapatos.*  
want 1SG.GEN GEN shoe

(9-b) 今, 彼にはお金が要る.

*Kailangan niya ng pera ngayon.*  
need 3SG.GEN GEN money now

感情主体がもっとも積極的に関与する感情を表す (10-a), 消極的に関与する感情を表す (10-b) とともに, 感情主体を主格とする格枠組みをとる.

(10-a) 私の母は私の弟がうそをついたのに怒っている.

*Na-galit yung nanay ko kasi nag-sinungaling yung kapatidko.*  
AV.RL-angry NOM mother 1SG.GEN because AV.RL-lie NOM sibling 1SG.GEN

<sup>4</sup> 疑似動詞は動詞のような意味を持つが, 動詞のように屈折をせず文法的には形容詞類に属する (Schachter and Otnes 1972: 261-262).

(10-b) 彼は犬が怖い.

*Na-ta~takot siya sa aso.*  
AV.RL-RDP~scary 3SG.NOM LOC dog

(11-a) は形容詞を用いて表現され, (11-b) では存在の構文を用いている.

(11-a) 彼は父親に似ている.

*Kamukha niya ang tatay niya.*  
look.like 3SG.GEN NOM father 3SG.GEN

(11-b) 海水は塩分を含んでいる.

*May asin sa tubig+dagat.*  
EXS salt LOC water+sea

(12-a) 私の弟は医者だ.

*Doktor ang kapatid ko.*  
doctor NOM sibling 1SG.GEN

(12-b) 私の弟は医者になった.

*Na-ging doktor ang kapatid ko.*  
AV.RL-become doctor NOM sibling 1SG.GEN

以下のどちらも能力的に可能であることを表す形容詞 *marunong* を用いる.

(13-a) 彼は車の運転ができる.

*Marunong siya mag-drive ng sasakyan.*  
can 3SG.NOM AV-drive GEN car

(13-b) 彼は泳げる.

*Marunong siya l<um>angoy.*  
can 3SG.NOM <AV>swim

(14-b) は「彼は早く走ることができない」という意味. 可能を表す疑似動詞 *kaya* を用いている.

(14-a) 彼は話をするのが上手だ.

*Magaling siya mag-salita.*  
good 3SG.NOM AV-speak

(14-b) 彼は走るのが苦手だ.

*Hindi niya kaya=ng t<um>akbo nang mabilis.*  
NEG 3SG.GEN can=LK <AV>run ADV fast

移動の表現では行為者が主格, 着点や通り道が場所格または属格という格枠組みが一般的であると言える。(15-c) は厳密には「彼はここを通った」という意味。

(15-a) 彼は学校に着いた。

*D<um>ating na siya sa paaralan.*  
<AV.RL>arrive already 3SG.NOM LOC school

(15-b) 彼は道を渡った。

*T<um>awid siya ng kalsada.*  
<AV.RL>across 3SG.NOM GEN road

(15-c) 彼はこの道を通った。

*Dito siya d<um>aan.*  
DEM.PROX.LOC 3SG.NOM <AV.RL>pass

(16-a) 彼はお腹を空かしている。

*Gutom na siya.*  
hungry already 3SG.NOM

(16-b) 彼は喉が渇いている。

*Uhaw na siya.*  
thirsty already 3SG.NOM

(17-a) は動詞を用いて「寒がっている」という意味を表す。つまり, 主格で現れている要素が被動作者としてコード化されている。(17-b) は形容詞を用いた非人称構文になっている。

(17-a) 私は寒い。

*G<in>i~ginaw ako.*  
RDP<PV.RL>~chill 1SG.NOM

(17-b) 今日は寒い。

*Malamig ngayon.*  
cold today

(18-a) と (18-b) はともに場所ヴォイスであるため, ここでは手伝う相手に主格をとっている。

(18-a) 私は彼を手伝った。

*T<in>ulung-an ko siya.*  
<RL>help-LV 1SG.GEN 3SG.NOM

(18-b) 私は彼がそれを運ぶのを手伝った。

*T<in>ulung-an ko siya=ng buhat-in iyon.*  
<RL>help-LV 1SG.GEN 3SG.NOM=LK carry-PV DEM.DIS.NOM

(19-a) 私はその理由を彼に聞いた。

*T<in>anong ko siya ng dahilan.*  
<PV.RL>ask 1SG.GEN 3SG.NOM GEN reason

(19-b) 私はそのことを彼に話した。

*K<in>ausap ko siya tungkol doon.*  
<PV.RL>talk 1SG.GEN 3SG.NOM about DEM.DIS.LOC

「A は B と会う」は相互行為として表現され、主格は複数である。

(20-a) 私は彼と会った。

*Nag-kita kami.*  
AV.RL-meet 1PL.EXCL.NOM

#### 参考文献

- Himmelman, Nikolaus P. 2005. Tagalog. Alexander Adelaar & Nikolaus P. Himmelman (eds.), *The Austronesian languages of Asia and Madagascar*, 350-376. London: Routledge.  
Schachter, Paul and Fe T. Otanes. 1972. *Tagalog reference grammar*. Berkeley, CA: University of California Press.

執筆者連絡先 : hayashi.mai.r0@tufs.ac.jp

原稿受理 : 2020年12月16日